

海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	アメリカ・ワシントン州シアトル市
研修先	兵庫県ワシントン州事務所
プログラム実習期間	2012年8月20日～9月11日
学部/研究科・学年	国際文化学部 3年

インターンシップ就業実習 報告書

先日、HBCCでのインターン業務を終えて帰国しました。今回のインターンシップでは様々な業務を経験させてもらうことができ、1カ月間という短い期間でしたが、密度の濃い、有意義でやりがいのある時間でした。そこで、現地での業務や過ごし方を振り返って、簡潔にですが、報告書としてまとめたいと思います。

インターン業務が開始して、2日目には、マリナーズの球場でジャパンナイトイベントが開催されることになっており、私たちインターン生はその試合を日本式の応援で盛り上げるというタスクがありました。アメリカでの野球の試合の応援は日本に比べて静かであるため、ジャパンナイトでは日本のように観客が一致団結して選手やチームを応援しようという趣旨でした。準備期間は2日間しかありませんでしたが、私たちは仕事を、応援のリズムの発案・応援旗の作成・鉢まきと腕まきの作成・ブラカードの作成と分担して各自とりかかりました。各制作物等が終わると、全員で応援の練習とリハーサルをし、本番に備えました。しかし、球場での本番では、事前に下見ができなかったこともあり、客席のスペースの都合で予定していた配置ができない、応援旗を振ることができないというアクシデントがありました。また運悪く、今回の試合ではヘルナンデスのパーフェクトゲーム達成記念の応援がすでに会場全体で行われており、私たちの日本式の応援がその勢いに圧倒されてしまい、試合開始直後は応援が機能しなくなっていました。それでも、応援の配置や方法を調整してめげずに続けることで、後半には何とか応援としてまとめ、周りの観客の方も私たちに倣って声を出したり、手拍子で参加してくれ、当初の予定とは形が変わりましたが、ジャパンナイトを日本式の応援で盛り上げるという業務は無事達成することができました。

私たちは、このインターン開始わずか2日目でこの行事に取り組みましたが、その際、想定外のアクシデントや、アメリカで日本式の応援をするという気恥ずかしさもあり、試合開始直後は「応援は無理かもしれない」という考えすらよぎりました。想定外のことに自分たちがうろたえてしまい、上手いこと調整できず仕事に対する見通しの甘さも実感しました。しかし、私たちの上司であり、応援団長でもあるベンさんが必死に応援を続ける姿を見て、自分たちも諦めず取り組もうと思うと同時に、自分たちは仕事としてこの場に来ているという意識が足りていなかったと実感しました。そのことをもう1度見つめなおし、観光気分を払しょくすることは、後に他の業務に当たる上で重要なことだったと思います。

私たち神戸大学からのインターン生のもう1つの大きな業務は、現地で9月に開催される秋祭りの企画と運営でした。オフィスからは、秋祭りのブースでは、兵庫県の紹介パネルとブースに来てくれた方に楽しんでもらえる催し、六甲嵐をしてほしいとだけ言われ、どのようにそれを実行するかは私たちインターンに委ねられていました。秋祭りには私たち神戸大学3人と、他大学から1人の計4人で企画したため、各自意見を出し合い、仕事をそれぞれ分担して、適宜ベンさんに報告しミーティングを重ねながら準備をしていきました。

一見簡単そうに見えるこの業務ですが、チームで意見をまとめながら進めていくのは難しく、コンセンサスがとれず、妥協しなければならない場面もありました。また、自分の担当する仕事に責任を持って取り組み、だからこそ、他人の仕事も尊重しなければならず、自分の分担以外に余計な口出しをしてはいけないという、日米での仕事に対する考え方の違いに戸惑うこともありました。それでも、秋祭りという目標を達成するという意識は皆同じであり、それを共有していたお陰で、お互いの仕事を尊重しながら準備を進めることができました。最終的に、兵庫県のパネルは自然・歴史・文化・食の紹介、シアトルとの比較、阪神淡路大震災について催しは、輪投げ、フォトブース、ラジオ体操、六甲嵐に決まりました。秋祭り当日は、雨も降らず、たくさんの方にブースに来ていただき、楽しんでもらうことができました。

他の業務としては、電話対応やデイリーニュースの翻訳、シアトルの広報も兼ねてはばタン日記を書くため工場見学等といったものがありました。また、コミュニティーカレッジで行われるキャリアに関する講演会に参加したい旨を伝えれば、そこに参加させていただき、興味を持ったことを企画書を書いてアピールすれば、それを実行させていただいたり、当初予定されていた業務以外のことを担当する機会にも恵まれました。

HBCCは人数も少なく、小さな事務所ではありますが、その分自分たちで考えて計画し、そして実行するということを経験することができ、非常に貴重な体験ができました。また、海外という普段とは異なる環境で日本人だけでなく、外国人の方と関わる機会も多くあり、様々な考え方を持つ人と出会ったことで、自分の考え方や仕事を客観的に見つめ直すことができ、語学力以上に、視野を広げることができたと思います。今回のインターンシップは、自分1人だけでなく、HBCCの皆さまや神戸大学の留学生課の方々など、多くの人の協力のお陰で無事に終わることができました。とても貴重な経験をさせてもらえたことに感謝したいと思います。ありがとうございました。

感想および意見

今回のインターンシップを経て得たものは、自己を、ひいては日本を客観的に見つめることができたという経験だと思います。私は今回のインターンに申し込んだときは、海外で働いてみたいというぼんやりとした憧れがありました。「アメリカで働く」という響きが書類審査や面接を通過するモチベーションの一因でもあり、その点で私の視線は海外へと向いていました。しかし、実際に海外に出てみて、各業務や、ホストファミリー事務所の方と話しをするうちに、日本とアメリカでの文化や考え方違いにぶつかるようになりました。その際、そのことが、今まで意識しなかった「日本」について海外から見つめ直すきっかけになりました。日本の中では当たり前になっていることや、常識と考えられることが通じないとき、なぜそれが通用しないのか、なぜそれを当たり前だと考えていたのかという問いが生まれました。その背景には文化や歴史的なものもあると思いますが、それについて議論を重ねることは非常に面白いことでした。例えば、なぜアメリカは都市に公共の交通機関が日本に比べてあまり発達していないのか、なぜ車に1人で乗っている人が多いのか、こういった日常の些細な違いでさえ理由があります。いわんや仕事をや。そういったことを考えながら、秋祭りで日本や兵庫の紹介のために色々調べたりすると、今まで知らなかった日本の一面が見えてきます。こういったことは日本の中にとりなかなか見えにくかったりすることも多く、その点で私の視線は日本へと向きました。

また、1カ月という期間でしたが、インターン生として毎日働くことは、日本でのアルバイトとは違い、自分たちで目標を設定し、どのように達成するかを考えて実行する貴重な経験でした。手探りでしたが、チームで何か仕事を成し遂げる際に必要な姿勢や責任感、自己管理能力等を養うことができたかと思

います。HBCCは小人数の小さな事務所なので、自分の裁量で仕事に取り組むことができる反面、自分の行動が全体に与える影響も大きいです。特に初めは観光客気分が抜けず、インターンとしての自覚が足りない面もありました。しかし、日々の業務に取り組むうちに、仕事と遊びのメリハリをつけられるようになりました。観光することも、アメリカという国を肌で感じるために大切なことで、海外でこのようにインターンシップをできることの魅力は、ここにもあると思います。

私はこのインターンシップにおいて、“働く”ということを実際の業務を通じて考えることができました。このような機会を与えてくださった、兵庫県ワシントン州シアトル事務所と、神戸大学、また留学生課の方に感謝したいと思います。ありがとうございました。